

# ポイズン・グローリアス

坂本 正彦

## 登場人物

金村真治（四四歳） スナック「ニューパラダイス」の店主

荻原蓉子（四〇歳） スナックのママ。金村の内縁の妻

ユン （二七歳） スナックの女性店員。東南アジアからの出稼ぎ労働者

高橋 （四九歳） 常連客（ほかに新聞記者1）

福島 （二八歳） 常連客（ほかに新聞記者2）

照屋 （二九歳） 常連客（ほかに新聞記者3）

大山 （三〇歳） 常連客（ほかに新聞記者4）

宍倉 （二八歳） フリーター

新聞記者・数名

カメラマン・数名

## 1場 記者会見（冬のはじめ）

河口沿いの地方の小都市。その場末にあるスナック「ニューパラダイス」。

店は地下にあるため、舞台奥の壁、床から数メートルのところにはドアと踊り場があり、客はそこから階段で船底のようなフロアに降りる作りになっている。上手側の壁には、マチスの『ブルーヌード』が飾られている。下手には、L字型のカウンターがあり、その壁に酒瓶の棚。その脇（奥）に、厨房への入り口が開けてあり、暖簾が下がっている。

いま、店内は記者会見の会場風にセットされている。すなわち、カウンターの手前に椅子が三つ置かれ、それに対面してソファや椅子が並べられている。すでに、新聞・雑誌の記者、カメラマン、テレビポーターたちが、亡霊のようにゆっくり店内を徘徊している。

店のママ・蓉子が暖簾をくぐり、カウンターの内側に登場。

記者1 おつ、始まるぞ。

記者たち、席に着く。いくつかのしわぶきとひそひそ声。

蓉子がリモコンのスイッチを押すと、ミラーボールが回り出し、アリアが大音響で鳴り響く。同時に、踊り場のドアがバーンと開かれ、店主の金村とホステスのユンが登場。フラッシュが一斉に焚かれる。

踊り場から身を乗り出して金村、記者たちに何かをわめく（「慌てんじゃねえよ、間抜けた顔しやがって」など）。しかし、その声はアリアとフラッシュ音にかき消され、ほとんど聞こえない。

二人は階段を降り、カウンターの前まで歩く。金村が記者たちに対峙して立つと、ミラーボールは回転を止め、アリアも止まる。蓉子がカウンターから出て来て、金村にマイクを渡す。蓉子とユンは着席。

話し出そうとした金村に、フラッシュが浴びせられる。

金村 あーあー、レミーは足りてますか、マルタンは？……ウオッホン（と、一つ喉を鳴らし）今夜も、場末のスナック、ニューパラダイスへ、ようこそ！……なんちって。しっかし、まあ、暇だよな、あんたらも。エリート記者さんたちがよ、こん

な田舎くんだりまで、ホントよく来るよ。雁首揃えて。ま、こっちはその度にお金をいただいてますから、別に文句もねえけどよ。(と、水割りを一口すすり) おっ、そうだった、そうだった。な、聞いて驚くなよ、この有料記者会見の売り上げ、今日で三百万超えちゃったぜ。(記者たちどっと沸き、フラッシュが焚かれる) 三百万だけ、三百万！ ったく、驚くよ。ま、せいぜい、元とって帰ってちょうだい。

記者1 (手を挙げ) よろしいですか。

金村 そちら、レミーは？ スコッチもあるけど、すこっちだけ……えっ、飲まないの？ 仕事中？ ケツ、お堅いこった。飲むのはフリーランスの人ばかりってな。んじゃ、ま、始めますか。どっこいしょとっ(と、座り)、どうぞ！

記者1 先日、危篤だった大山さんが、亡くなれましたが……。

金村 ええ、ええ、聞いてますよ。

記者1 何か、お言葉を。

金村 そりゃ、痛恨の極みだよ。不徳の致すところって言うか……

記者2 「不徳」とおっしゃいますと。何か、身に覚えが？

金村 突っ込むねえー。いや、いいんだ、いいんだ。ブン屋ってのは、そうじゃねえとな。……あのさあ、大山は肝臓かどっか、悪かったんだろ。だったら、もう少し酒を控えさせればよかった、って。そういうことだよ。

記者3 奥さんは、いかがでしょう？

ユン (片言の日本語で) 悲シイヨ。

記者2 スミマセン。ユンさんと大山さんは、偽装結婚だったって、噂がありますが。

ユン ……？

記者2 つまり、ユンさんは、複数の日本人の方と、以前から……

金村 (遮って) あんたさあ。ユンはよ、偽装結婚とか、難しい日本語はわかんねえんだよ。あんただって、英語で偽装結婚って言える？ な、言えんのかよ。

記者2 それは……

金村 ホレみる。そういうことだよ。

記者3 しかし、ユンさんは、一年前にもご主人を亡くされてますよね。

金村 ありゃ、事故だろ。

記者3 だけど、一年のうちに二人もですよ。

金村 警察が、そう発表してんだろが、事故だって。

ユン 文句ガアンナラ、さつ二言エ！

記者たち、沈黙。金村、ほくそ笑み、水割りをすすする。  
静寂の中、一本の手がゆっくりと上がっていく。

記者4 (ついに手が拳がりきり) よろしいですか。

金村 (記者4の顔を見ずに) どーぞ。

記者4 (立ち上がり、話し出す) 私どもが調べたところでは……

金村 (遮って) お、大山！

記者4が死んだ大山に似ているので、金村、驚いて立ち上がる(実際、記者4と大山は同一人物が演じる)

記者4 亡くなった大山さんは、ここで毎晩、栄養剤を……

金村 (遮って) 生きてんじゃねえか！ 足ついてんだろ、お前。

蓉子 ちよつと、金ちゃん、しつかりして。

金村 えっ……ああ……なんだよ、脅かすなよ。あんた、大山に似過ぎ！

記者4 で、お認めになるんですね。栄養剤を飲ませていたことは。

金村 『飲ませた、飲ませた』って、人聞きの悪い。サービスだよ、サービス。あいつらはさ、何でも俺に頼ってくるんだ。仕事を世話したのも、俺。住むとこ世話したのも、俺。元気がなければ、栄養剤くらい飲ませたさ。

記者4 しかし、毎晩……

金村 (遮って) 持ちつ持たれつってことだよ。うちみたいな小さな店じゃよ、常連つてのは、身うちみたいなものなんだ。そこんところ、よろしく。

記者4 でしたら、荻原蓉子さんにお伺いします。

蓉子 わたし？

記者4 荻原さんのお父さま、二年ほど前に入院なさってますよね。

金村 おいおい、誰に聞いたんだ、そんなこと。

記者4 (無視して) 三カ月もですよ、憶えてないんですか。

金村 憶えてないなんて言ったかよ！

記者4 失礼しました。では、病名は何でしょう？ お教えいただけますか？

蓉子 えっ？

記者4 病名です。入院したお父さまの。

蓉子 それは……

金村 ちょっと、体調を崩したって、聞いてますがね。

記者4 荻原さんに、お尋ねしてるんですが。

金村 お前よお、病名とかそういうのは、プライバシーだろが。そりゃあ、結構な金とってんだ、俺のことなら、いくらだってしゃべるさ。だけど、蓉子の親は、関係ねえだろ！

記者4 私が調べたところでは、薬物中毒です。それも風邪薬と酒を併用して……。

金村 (遮って) やってられっか！ こんなんで！

金村、マイクを床に叩きつける。不快なハウリングが響く。

金村 ルールってもんがあんだろが、ルールが！ こっちは善意で会見、開いてやってんだ。ちったあ気を使え！ ったくよお。今日は仕舞いだ。

記者2 ええっ。まだ一〇分も経ってないよ。

記者1 そうだよ。困るよ！

記者3 いくら払ったと思ってるんだ。

記者たち、立ち上がり、口々に文句を言う。

金村 (記者4を指し) あいつが悪りんだろが、あいつが。文句があんなら、あいつに  
言え！

金村、出ていこうとするが、その行く手を記者たちが遮る。

記者1 ちょっと待ってくださいよ。

金村 気安く触んじゃねえ。どけ！ (と、なおも歩く)

記者4 (金村の前に立ち塞がり) 金村さん。こいつに、見覚えがあるでしょう？ (と、

ポケットから錠剤を出し、付き出す)

金村 あるはずねえだろ、そんなもん！

記者4 これは、あなたが毎晩、大山さんに飲ませていた薬です。

金村 ……お前なあ、口が臭いんだよ。歯磨いてんのか！(と、立ち去ろうとする)

記者4 私は、この薬を常連の方から手に入れたんです！

金村 (ピクツと立ち止まり) 常連？(と、記者4に近づき) するってえと、なにかい、常連の誰かが、俺をちくったってのかい？

記者4 そうです。早い話が。

金村 ホー、そりゃあそりゃあ。よくそんな取材ができたな。褒めてやるよ(と、記者4に頭突き)

記者4、椅子に倒れ込む。記者たち、どよめき、フラッシュが焚かれる。

金村 いいか。俺はな、警察なんて、これっぽっちも怖かねえんだ。おかしな記事、書いてみる。地獄の底まで追っかけて、必ず落とすし前つけさせっからな！

記者4 (よろよろと立ち上がり) あなた、完全にイカレてる。

金村 イカレてる？ なるほど。たしかに俺は、人殴るとかえって気分がスーと落ち着くからな。こんなふうによっ！(と、記者4を殴る)

記者4 プハツ(と、呻き床に倒れる)

金村 テメエらごときの、飯の種にされてたまっか！ 何もわかつちやねえくせに。本当のことは、何ひとつ！

踊り場のドアが、ドンドンドンと激しく叩かれる。

金村、ドアを見上げる。 暗転。

## 2場 終わりの始まり(前場の約一年前・初冬)

踊り場にのみスポット。扉が開き、ポストンバック片手に宍倉、登場。

宍倉、数歩前に歩み、踊り場の手すりを握る。